

書評：藤岡毅著『ルイセンコ主義はなぜ出現したか：
生物学の弁証法化の成果と挫折』学術出版会、
2010年、ISBN-13：978-4284102858

金山浩司*

イデオロギーによる科学への抑圧、あるいは似非科学の跳梁を示す科学史上の事件として、旧ソ連におけるルイセンコ学説をめぐる出来事がしばしば挙げられる。ルイセンコの生物学学説は、獲得形質の遺伝のように誤謬であることが明らかになった発想を基としていたほか、経験的事実の総合の方法等においても問題ばらみの、科学理論としてはきわめて粗雑なものであった。それでもこの学説は、ソ連邦において数十年にわたって公認の生物学理論として認められ、正統的遺伝学は迫害あるいは冷遇され、同国の生物学の発展・農業生産力の進歩に破壊的な影響を及ぼした。実際のところ、当時のソ連のいかなる社会・政治的な状況のもとで、こうした学説が出現発展し、ルイセンコのような人物が権勢をふるうことになったのだろうか。

一昨年、この複雑な問題を真正面から取り上げた著書が現れた。長年にわたってソ連型社会主義の問題に深い興味を抱いてきた著者藤岡は、ソ連崩壊をきっかけとし、自らの知的バックボーンである生物学に着目、ルイセンコ主義を扱う本格的な歴史研究に踏み込んだという。本書は、桃山学院大学に提出された博士論文をもととしており、ソ連の社会的・政治的状況や生物学の発展状況をみながら、次のようなことを、幅広い史料の渉獵と読解、および的確な二次文献の援用により、歴史的に示している。すなわち、ルイセンコ学説がいわゆる弁証法的唯物論からの必然的帰結といったようなものではないこと、マルクス主義哲学体系の解釈に関する劇的な転換が、1930年前後に政治的圧力によって起こり、これが遺伝学者を弾圧し、ルイセンコ派の興隆を促した要因であること、ルイセンコ派の興隆と喧伝がソ連本国のみならず、当時ソ連体制に期待をかけていた資本主義諸国のマルクス主義者・生物学者たちにも相当程度受け入れられたこと、この傾向は日本においてとりわけ強かったこと、等である。

藤岡の筆致は情熱的であり（その情熱は、時として、もろもろの事象の価値判断を記すにあたり学問的著作で許されるラインを越えさせてしまっているのではないかとすら思われる）、彼が示す図式は極めてわかりやすい。本書の副題である「生物学の弁証法化」とは、哲学による生物学への単なる容喙ではなく、生物学、遺伝学の論争を弁証法的唯物論というソ連国家イデオロギーと密接に関係する哲学体系と絡み合わせようとする営為とされており、これに対して

* 日本学術振興会、東京工業大学大学院
自宅) 東京都世田谷区鎌田2丁目15-22-403
E-mail : kikanayama@gmail.com

は、藤岡は知的試みとして基本的に高く評価し、それがスターリン体制の樹立とともに教条的イデオロギーへの拝跪によって知的実質を失ったことを繰り返し強調している。

藤岡の呈示する構図をもう少し具体的に概説するなら、それは以下のとおりである。藤岡は1920年代のソ連哲学論争での一方の派であるデボーリン派の、自然科学への内的理解をたいへん高く評価している中、彼らが「文化革命」の時期（1920年代末—1930年代初め）にミーチンら若い世代の人々、プロレタリア階層を性急に登用抜擢する風潮の中で出現してきた人々によってとってかわられたことを嘆く。確かに、1920年代のマルクス主義者同士の論争は、当時の生物学における焦眉の問題—遺伝学かラマルク主義か、という対決や、メンデルイズムとダーウィニズムの対決と統合などを真っ向から扱った、魅力的なものに映る。「20年代ソ連の遺伝学とラマルク主義の論争は、30年代以降のリュセンコ論争と本質的に異なり、正当な科学論争としての資格をもっている」（75頁）。

「文化革命」によるスターリン化、それに引き続く科学哲学界での主導権の急激な交代、科学に対するイデオロギー上の圧力の増大、スターリン式の急激な工業化のもとで農村に飢餓ひいては政治的危機が生じ農業生産性の増大が急務となったこと—これらがソ連における遺伝学に対する圧力として働き始め、1930年代を通じて、リュセンコ派の政治的・社会的地位の向上、そして国際的にも知られた成果をあげてきたソ連の遺伝学者たちに対する弾圧が行われた。リュセンコを促す諸要素は、1930年代初頭のいわゆる文化革命期に現れていたのである。

正統的遺伝学者たちにとって、1930年代半ば時点での形勢は悪いものではなかったにもかかわらず、彼らは結局リュセンコ派を抑えることはできなかった。1937年から38年にかけての大粛清—何人もの遺伝学者が犠牲となった—に乗じてリュセンコ派は、自らの息のかかった者を各種研究所に送り込んだ。大粛清の波が去り、「マルクス主義哲学」の科学に対する指導的役割がスターリンによって強調されるに至って、遺伝学に対するイデオロギー的統制は確実なものになった、と藤岡はみている。1939年秋に行われた党機関紙『マルクス主義の旗のもとに』誌主催の討論会が、このことを示す好例として挙げられている。ここでは遺伝学者も、リュセンコ派も、それぞれの立場に基づいて生物学理論とその実践に関する対等な討論を行ったわけであるが、最終的な判定はミーチンら党哲学者に任されてしまった。彼らの支持を得たリュセンコたちは「勝利」した。その後、第二次大戦中・戦後には英米との交流が復活したことによる曲折—遺伝学者たちの巻き返し—もあったが、最終的には、スターリンの個人的・直接的な介入もあって、48年8月の農業科学アカデミー総会以降、リュセンコ派のソ連生物学への支配は確立し、このことが国外での遺伝学論争をも相当程度方向づけることとなった。

藤岡の叙述に付け加えるべきがあるとするれば、それは生物学以外の分野での哲学・イデオロギー論争との対比であろう。実際のところ、本書が上述したような明快な図式を得ているのは多分に、これが生物学史を対象にしているがためで、スターリン時代のソ連科学とマルクス主義イデオロギーとの関係は全体として、それほど単純ではない。たとえば、物理学においては、

1930年代にあってもイデオロギーによる「容喙」は物理学理論そのものの是非という次元にまでは及ばず、「ブルジョア物理学」と「プロレタリア物理学」などという区分法も生まれず、その論争は一定の哲学的含意を含んだものであり、また、現代物理学の基本的成果と弁証法的唯物論を両立させる言説の確立に物理学者・哲学者双方が尽力してそれに成功したこともあり、破壊的な側面は生物学におけるほど目立ったものではなかった。言語学においては、1940年代後半のスターリンによる容喙はかえって建設的な結果をもたらした。つまり、総じて、いわゆるミーチン哲学（スターリン流に解釈された弁証法的唯物論）の唱道と個別科学がこうむった害は、少なくとも藤岡の描く生物学ほどには、他の科学では目立たなかった。

ルィセンコ主義は、層が厚いといえないソ連科学史の中では例外的に充実した先行研究を持つ研究領域であるが、そういった諸研究に比べての本書のきわだった特徴は、1920年代と30年代に生物学に関する哲学・イデオロギー論争の様相に劇的な差がみられることを非常に強調していることにある。このこと自体は正しく、本書の魅力を形作るものであるが、同時に問題点もこの強調から発生しているかもしれない。

評者が持つ疑問は、ミーチンらがもった権威、ミーチン派の団結力と、彼らによるイデオロギー的弾圧の力を藤岡が一貫したものとして過大評価するあまり、1930年前後から戦後に至る、20年間に及ぶ重層的で複合的な歴史過程を単純化してしまいか、というものである。1930年代初頭の文化革命の時期、および1939年の『マルクス主義の旗のもとに』討論会、におけるミーチン派の権勢は、スターリンの後押しを得たこともあって確かに目立つものである。しかし、大粛清の時期にはミーチン派とて粛清の嵐から超然としてはいなかったこと、ミーチンが事実上の編集主幹を務めていた『マルクス主義の旗のもとに』が党上層部により非難され廃刊に追い込まれた1944年ごろ、同派の権勢に大きな揺らぎが生じたことは、本書の記述から抜け落ちているわけではないにせよ、あくまで二次的なエピソードとしてとらえられているようにみえる。

藤岡の言うところでは「主意主義と実用主義」こそがミーチン哲学の本質である。こうした評価は次のような文言にも表れている。「科学における理論対立を『階級闘争』や『唯物論と観念論の対立』の問題に還元するミーチンの見地は、事柄を図式的に単純化したもので、〔…〕」「『科学の党派性』を掲げて頭角を現したミーチン哲学の政治主義的本質〔…〕」（172頁）。これらの性格付けは正しい。しかし、だからミーチンが「科学理論の客観性を正しく理解することができず、遺伝学を正当に評価することができなかった」（174頁）という記述は妥当であろうか。ミーチンが科学の内在的論理を理解しないからといって、彼がルィセンコ派のほうに肩入れするとは限らない（実際、言語学論争ではミーチンの「師」スターリンは、妥当な理論のほうを推したのである）。藤岡も指摘するように、当時、遺伝学理論が専門家にとってすら論議の余地ある領域であり、正誤の判断がつきにくかったとすればなおさら、ルィセンコ学説の興隆について弁証法的唯物論そのものに責任を負わせられない（藤岡が正しく強調しているように）

のと同様、「ミーチン哲学」そのものには責任を負わせられないように思える。イデオログらが科学の内容・客観性を理解しなかったことが問題なのではなく、当時の社会的・政治的状況の中で有用と思われたルィセンコ派に対して、イデオログらが機会主義的に追随し、権威づけを行ったことが問題なのである。

我が国にも多大な影響を及ぼした、ルィセンコ学説その他ソ連イデオロギーと科学にまつわる論争に対しては、半世紀以上を経た今、ようやく冷静な歴史的概括を成せるだけの距離感ができつつある。学問的で精緻な、均衡のとれた歴史的記述の出現が今こそ、期待できるだろう。本書は、我が国の科学史史におけるこの方面の歩みに貴重な足跡を残すものである。